

「新教科群」

はじめに

2000年度よりスタートした新教科は2005年度で高1は5年目、高2は4年目を迎えた。この間の取り組みの総括として2006年2月に、『学びをつなぎ未来を拓く—大学と連携した新教科の授業実践—』（黎明書房）を出版した。ここでは、授業実践のみならず、「『21世紀社会を生きる力』の育成に向けて」「現代日本社会における中等教育の課題と人間像」（中部大学 野田真里先生）、「高等教育の現状」（名古屋大学 高井次郎先生、夏目達也先生）「『心と身体の科学』が目指すもの」（名古屋大学 山本裕二先生）といった大学教員にも執筆していただいて、これからの教育の中での新教科の役割について総括することができた。

詳しくは『学びをつなぎ未来を拓く—大学と連携した新教科の授業実践—』（黎明書房）の中で総括してあるが、ここでは、新教科の特徴と成果と課題を簡単にまとめてみたい。

1. 「カリキュラム」の中での位置づけ

—中高一貫カリキュラムにおける新教科—

新教科は高校1年生と2年生を対象とした教科であり、

高校1年生：「心と身体の科学」「自然と科学」

高校2年生：「国際コミュニケーション学」「共生と平和の科学」

の4つの講座からなる。週に1時間の授業であるため、一つの講座は0.5単位となり、1、2年生の2年間で2単位履修することになる。

中学2、3年生の選択プロジェクトでは、各教科の観点から考えた重点的にあつかいたい学習内容やのばしたい力、あるいは補いたい学習内容を9教科で展開する。これに対して、この新教科では、各教科のねらいが出発点であっても、既成の教科にとらわれることなく4つの大きな課題を考えることによって「個性探求期」につづく「専門基礎期」である高校1、2年生の時期において次の「個性の伸長期」につながる力を育てることを目的としている。

2. 既存教科と総合人間科（総合学習の時間）をつなぐ新教科

総合人間科には教科の枠がない。教科の枠を取り払い、生徒一人一人の興味・関心から知的好奇心を育て、学ぶ楽しさを体感することから学びの基盤を創ることを目的としているからである。しかし、学年担当の教員で

一人当たり20人の生徒の指導をする過程では、あまり教員の専門性を生かすことはできない。せっかく学びの楽しさを体感した生徒がいても、自分で学びを構築していく力までつなげられないことも多い。

これに対して新教科は教科のねらいが盛り込まれていて教員の専門性もある程度生かすことができる。何かを学ぼうとしてもなかなか自分で追究することができない生徒にとってはある程度の教材や考える題材が用意されている新教科は何もかも自分でやらねばならない総合人間科よりも取り組みやすい。その意味で、新教科は既存教科、総合人間科の間に位置する特性をもっており、両者をつなぐ役割も担っている。

3. 新教科と既存教科との関わりの3つのスタンス

新教科の講座テーマは非常に広い内容を含んでいる。新教科と既存教科との関わり方には次の3つが考えられる。

1つ目は、「既存の教科領域にある内容を複数の教科が関わり深化させる」というスタンスである。例えば、保健の中で、身体について学ぶが、それを体育・理科的な切り口も含めて学ぶことによって内容を深化させることができる。

2つ目は「既存の教科領域にある内容を複数の教科が関わり統合・再編する」というスタンスである。例えば、世界史では十分に扱えない科学誌を社会・理科・数学の教員で担当することによって、理科や数学の原理がどのように生まれてきたのかという時間系列をもって捉えることができようになる。さらに、時代の流れの中で、どのような“人”が発見し、人々の生活にどのように影響を与えたのかを考えることは、自然に関する原理と“人”との関わりを認識する機会となる。このように既存の教科どうしの関わりを改めて問い直し、それぞれの教科において手薄である側面を再認識することは、教科自体にも変化を及ぼすこととなる。

3つ目は「既存の教科領域にはほとんど含まれないが、生徒の今後社会生活に必要な内容に取り組む」というスタンスである。例えば、コミュニケーションという領域は既存教科の中に単元として存在している訳ではない。しかし、生徒が社会の中で生活し、自己実現を目指す中で、必要不可欠な力の1つであり、高校生の中にコミュニケーションとは何かを改めて考えてもらいたい領域である。

4. 三人の担当教員によって多角的に考える

一つの講座を三人の教員で担当するため、一クラスを

三つのグループに分けた。これは実践編を見ていただくとわかるように、一つの大きなテーマに対して三つの角度からのアプローチをするグループを作り、生徒の希望によって三つに分けて、小グループでも活動できる時間を設けた。

担当教員は年度によって多少異なるが、昨年度は以下の通りである。

「心と身体の科学」：体育、養護、理科

「自然と科学」数学、理科、社会

「国際コミュニケーション学」：英語、国語、美術

「平和と共生の科学」：英語、家庭科、理科

担当者は変化するが、「心と身体の科学」には体育と養護、「自然と科学」には数学と理科、「国際コミュニケーション」には英語と国語を継続的に入れて内容に連続性を持たせるようにしている。

新教科のカリキュラムにおける教務上の問題点は時間割が組みにくくなることである。つまり、本校は1学年3クラスであるので、3クラスにそれぞれ三人の教員を割り当て、かつ学外講師の方の都合とあわせる必要がある訳である。外部講師の方に3回同じ話をしていただいたことも多いが、時間割変更をして3時間を1つにまとめ、合同授業を行う場合もある。

5. 新教科とキャリア形成

新教科での学びの体験が大学の進路に直接結びついてくるケースは、総合人間科に比べて数的には少ないかも知れないが、もっと長期的な“キャリア形成”に影響を与えている場合もある。

例えばR君は、新教科の「共生と平和の科学」(高2後期)で「児童労働」について考えたことをきっかけとして、児童労働に関する作文を書いて「児童労働世界子ども会議」に応募し選ばれて、イタリアまで行って発表を行った。その後彼は、学校祭の分科会での発表や「地球市民の会」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属中等教育研究センター主催)で発表するなど積極的な活動を続け、これを自信として、AO入試で進路を切り開いた。進路自体は「児童労働」に関する分野ではないが、「僕のこのような取り組みや行動の原点に新教科での学びがある。新教科では、生きてゆく上で必要なことだし考えていかななくてはならないことを友達と一緒に学んだ。僕が大学で専攻したいことは別にあるけど、これからも“子どもを助ける活動”に携わって行きたい。」と言っていた。このように、自分の興味・関心から出発する総合人間科のみでは、体系的に深めることができない領域でありながら、上記の生徒の言葉を借りると、生きてゆく上で必要なことだし考えていかななくてはならないことである課題を“学び会える友達”とともに学ぶことが、自分の進路を客観的に見つめる機会となり、進路選択の考えに幅をもたせることに繋がっている。そして、新教

科で考える課題は、単に大学の進路選びというだけでなく、その後の学び方や社会での活動にも繋がってゆく“キャリア形成”の柱の1つとなる可能性をもっているのである。

6. 新教科で育つ統合する力

(1)リアルタイムで学ぶことが知の統合につながる

1クラスを3人の教員で担当するため13人~20人の少人数での展開が可能となる。このため、より多様で多面的な学習活動が可能になる。必要に応じてT.Tで授業を行うこともでき、既存の教科より自由に新たな試みができる。また、本書に執筆していただいている山本先生、野田先生、高井先生には授業案を立てるところから一緒に授業創りに参加していただいた。本校教員以外の方とともに授業案を考えるということは、本校教員だけで案を考えるのとは大きく違い、授業案自体を多角的、客観的に考える機会となった。

また、学外講師を招いて特別講義を行うことで、より社会との結びつきが強くなり、新教科で扱っている課題をリアルタイムで考える機会となった。

(2)新教科で育てる“知と感情を統合する力”

既存教科では、問題集の答を見ると正解だと思ひ、知識向上のよりどころとなる。自分が学んできた知識を蓄える引き出しは少々未整理でもその教科で問題を解くだけなら探しまわってひっぱり出せる。しかし、新教科ではそれができない。既存教科で学んだ知識の引き出しから自分で取り出す練習となる。そして次に使えるように知識の引き出しを整理するようになる。そして、知識の引き出しを増やさねば、様々な事柄を考えることができないという感覚をもち、課題を考えるために必要な生きた知識を得る方法を身につける。

さらに、理論的には賛成するが、感情的に反対という課題もあることを学ぶことによって、感情的な面と理論的な面をどのようにつなげていくかを考える機会となる。さらに、一度発表した自分の意見が変化することが恥ずかしいことではないということを経験する。このため、次の生徒のような感いを正直に書く生徒が少なからずいた。

「新教科を学ぶと、正しいと思っていたことが本当に正しいのか疑問になってしまう。その結果、自分の考えが宙ぶらりんになったのかも、と感じることもあった。答えのないテーマだから、迷いをもったままになってしまうときがあった。」

例えば次の生徒は、自分の意見と正反対の意見を持つ役をロールプレイングで演じて次のように書いている。

「最初は、プリントに書いてあることを読んだり、ビデオで見た人の言っていたことをまねして言っただけだったけど、実は後半、その『反対の意見を持つ人』の

気持ちが何となく伝わってきたというか、やっと理解できてきたというか……。そのせいで、また自分の意見にまよっちゃったけど(笑)。とにかく、『私は自分の意見ばかりを主張しすぎていて、周りが見えていなかったんじゃない?』とかを考えることができました。だから、あの“劇”は、私にとってはただの“劇”ではなく、大きな経験になりました。自分の意見だけでなく、相手の意見を聞くことの大切さを知るといふ。」

このように、生徒たちは、特定の答を確定できない大きな課題を前にして、本当に自分の意見が正しいのかと揺らいだ。この“揺らぎ”の体験こそが新教科の本質でもある。生徒たちは全力で自らの“知と感情を統合して”考え、学ぶ中で揺らぎながらも思考が広く発展していくという経験をする。この経験こそは、時代の変化の中で新たに必要とされている学びではないだろうか。

既存の教科の中で、“正解”が答えられないために、積極的でなかった生徒も、新教科ではよく発言した。「今まで理科という科目があまり好きではなかったのですが、新教科を通してさまざまな知識を得て、その知識をもとにして今の社会問題について考えることによって、前より少し理科という科目が好きになりました。」というように、既存の教科の知識を使って考える機会をもったことが、既存教科に対する自分の姿勢を問い直すきっかけとなった生徒もいた。

新教科は“学ぶ楽しみ”や“なぜ自分が学ぶのか”を改めて考えるきっかけとなる。この新教科の取り組みを通して、生徒一人一人が自分で学んでいくその“学びの姿勢”を育てていってほしいことを願っている。

7. 課題

次のような観点に分けて課題をまとめてみたい。

(1)3つのグループの関連

1つの講座を3人の教員で担当し、3つの小テーマを設け生徒の希望によって3つのグループに分けた。初年度は3つのグループがどのように関係するかを授業を実践しながら考えていく状態であったが、2年目からは、他のグループの内容を把握した上で、自分のグループと他の2つのグループとの関連を考えていくことができた。このためには、教員どうしの情報交換が重要であるため、打ち合わせを繰り返した。また、3グループ合同や2グループ合同の授業や発表会、討論会を入れることが、生徒のみならず教員の情報交換にも役だった。その中で、例えば「心と身体の科学」ではこの大テーマを個としての人の視点や社会の中での人間から考えるという軸を固めていった。また、「国際コミュニケーション学」では、日本、韓国、英米の文化、という観点と言語、生活、表現という観点を軸に置いて3つのグループの関係を常に考えていった。

しかし、軸がしっかりしてくることで担当教員

が固定化する面があるため、来年度以降検討していきたい。また、軸が太くなるごとに、半期14回程度という授業数がより少なく感じられるようになり、「通年で活動したい」という生徒の要望があったり、担当教員の中に内容を十分盛り込めなかったという思いも持つようになったりした。この点についても検討していきたい。

(2)4つの講座の関係と中・高6カ年のカリキュラムの中での位置

4つの講座の中で、「共生と平和の科学」は総括的な位置にあり、考える視点も地球規模と大きくなる。また、考えるだけではなく、自分たちは何をしなければならないのか、自分は何ができるのかまで、踏み込んで考える機会となる。

それぞれの講座の中で大学教員など外部講師の方の話を聞く機会を設けてはいるが、少ない回数の中ではそれも限られてくる。そこで、授業時間外(土曜日や夏休みなど)に企画している「学びの杜講座」と連携して、新教科での学びをさらに発展させていくことができないかを検討している。

(3)新教科と総合人間科、既存教科との関係

生徒は総合人間科との違いを次のように表現している。

「テーマが決まってい総人より目的が明確で学びやすい」「グループの中では全員が同じことをやっているの意見交換をしやすい」「深く知ることができる」「自分の興味がないわけではないけど、総人では、あまり設定しないようなテーマで勉強できてよい」

(1)でも述べたように、授業の軸がしっかりしてくると、生徒の理解の度合いや要望に応じて活動を変更しながら組み立てていった初年度に比べて自由度が少なくなっている面もある。授業内容についてもある程度生徒が考えることができるような自由度を残しながら、さらに改良していきたい。

既存教科との関係については、「それぞれの意見が重視される場所」「公式とか構文を覚えたりするのではなく自分の持っている知識や学習して身につけた知識などを構築して考えるという違いがある。」「たくさんの教科が合わさっているので、多方面から観る必要がある」「普段の教科ではきっと知ることのできないことを深く知ることができてよかった」「新教科の方が現実味がある。勉強していて“ああ、これはこういう時に使えるなあー”とか、考えやすい。」「自分で考えて自分の意見を持つようにしないと実のない授業になってしまう」「最先端のことに触れられたこと」「先生との距離が違う。とても近く感じられて、授業を受けているという、堅苦しい感じがなくて楽しい。」「体験しながら学習できる」「理科は表面的なことしか勉強しないがこの教科は内面的なことを見

ることができる」

これは2005年度前期の最後の授業で書いてもらった内容であるが、生徒一人一人が大切な観点到に気づいていることがわかる。しかし、最後の感想にあるように、既存教科が表面的（おそらくは、知識が中心で人としての判断という内面的な部分がないという意味であると思う）であるとすれば、それは問題である。また、既存教科の中でも現実味のある要素を取り入れる工夫をしているし、最先端の内容を盛り込んだり、受け身的な授業にならない努力をしたりしているつもりであるが、まだ生徒にとってみると大きな違いがあるということであれば、再度検討していかねばならない。

(4)評価

評価という面では、意見発表や討論会、活動の中で、お互いに意見を言うことによって自分の意見を見直すことが自らの評価を受けることになる。また、担当教員からのアドバイスも評価となる。

4つの講座とも原則的に定期テストは行っていない。そのため、レポートや、毎回の活動から考えた自分の意見を書いたワークシート、活動の様子から5段階評定をつけている。しかし、それぞれに自分で考えた意見が書いてあるため優劣つけがたく、絶対評価の特性を生かして、全体的に高い評定となっている。

現在は、レポートやワークシートの教員による評定の割合は各担当教員に任されている。年度ごとに担当者が多少変化する中での系統性については検討が必要である。

(5)8つの力との関係

この紀要の最後に掲載したように、「本校が育てる8つの力（①理解する力 ②思考する力 ③表現する力 ④課題を設定する力 ⑤自分を知る力 ⑥創意工夫し解決する力 ⑦探求する力 ⑧人や社会と関わる力）」を考えてアンケート調査を行った。このアンケートを行うに当たって新教科の授業目標を次のA～Dのようにまとめ直した。それぞれの①～⑧で表されている項目はそれぞれそれぞれの授業目標において求める力と考えて調査を行った。

A. 教科の枠を超えた多角的な視点から考える力を育てる。

①理解する力 ②思考する力 ③表現する力

B. 多様な学びを体験し、幅広い認識力を養う。

①理解する力 ②思考する力 ③表現する力

⑤自分を知る力 ⑦探求する力

⑧人と社会と関わる力

C. 学際分野の専門的学習を通して、知的好奇心を刺激し、主体的に取り組む力を養う。

①理解する力 ②思考する力 ⑦探求する力

⑧人と社会と関わる力

D. 特定の答のない課題に対する判断力を養い、行動力を育てる。

①理解する力 ②思考する力 ⑥創意工夫する力

⑧人と社会と関わる力

巻末のデータは、「どちらでもない」が3、となっているため、3より大きい数字が肯定を示している。

新教科の肯定度は高1より高2、高3の方がすべての項目で高くなっている。肯定度が最も高かった力は、「①理解・②思考-様々な問題が入り組んだ現代社会問題に関する知識を得ることができる、多様な視点から問題に気づく」。次に高かった力は、「②思考③表現-課題を筋道を立て深く考えることができる、社会には様々な課題があることを再認識することができる」であった。

全体のデータの相関を調べてみると、新教科・学びの杜・総合人間科の相関関係は、高1は新教科の中での各力の相関は高いが、学びの杜や総合人間科との相関はあまりない。高2は新教科の中での各力の相関が高いだけでなく、総合人間科との相関も高い。高3は新教科の中での各力の相関が非常に高く、学びの杜や総合人間科との相関も高い。学習を積み重ねていく中で、生徒自身も自分自身にどのような成長があったのかを捉えることができるようになっていく傾向がある。

これらのデータをおおまかに見ると、教師が育てようとしている項目に対する肯定度は平均である「3」に対する有意差があると思われる「3.25」を越しているため、教師と生徒では、新教科に対する考えが似た傾向にあるといえる。しかし、これはあくまで、生徒の自己評価であり、本当にねらいとしている力が育っているかどうかは、客観的な手法で測らねばならない。

2006年度に行っている客観的なデータをもとに2007年度の新教科においては、改編を行う予定である。

「新しい中等教育へのメッセージ」(黎明書房)、「学びをつなぎ未来を拓く-大学と連携した新教科の授業実践-」(黎明書房・2006年2月)と一部重複します。

(石川久美)